

2025年3月28日提出

## 成果報告書

報告者：総合政策学部3年 中村彩

発表タイトル：学生主導の学びのコミュニティ再建と新たな試み～慶應義塾大学SFCフランス語研究室のSA制度活用事例～

活動期間：2025年3月26日～27日



### 発表概要：

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)のフランス語研究室では、伝統的にSA (Student Assistant)制度を利用して授業補助だけではなく、学内のフランス語学習コミュニティの拡充に努めてきた。様々な理由により停滞の続いたフランス語研究室であったが、2024年以降のフランス語研究室はSAたちの自主的な取り組みにより活況を取り戻し、豊かなフランス語学習コミュニティが構築された。

本発表では、SFCフランス語研究室のSAたちの様々な試みや、ネットワークとチームワークのあり方、学生主導のコミュニティ再建に向けた工夫、活動の中で出会った問題点などを教員、SAの双方の観点から報告する。また、現代における学生アシスタントを活用する学習活動分析の機会とすると共に、今後のさらなる展望を紹介する。

大学キャンパスにおけるフランス語学習コミュニティ運営と、学生アシスタントの活用および協働の一端を紹介することで、より良い学習環境づくりを共に考える機会にしたい。

### 発表した学会について：

Rencontres pédagogiques du Kansai 2025 (RPK 2025)

RPKは“Rencontres Pédagogiques du Kansai”の略で、外国語としてのフランス語教育に関心のある教員・大学院生が参加し、毎年3月下旬に開かれる。研究会での発表は「アトリ

エ」の形式を取り、参加者同士でフランス語教育に関する考えや経験、授業での実用的なテクニックについて意見交換をする。

活動は1987年、フランス共和国駐日大使館文化部のJean-Paul Honoré氏の下、関西の教育機関に所属している約20名のフランス語教員によって開始された。2025年3月は第39回大会にあたる。第1回大会では50名ほどであった参加者は、ここ数年で約120～130名ほどの参加規模になっている。

今回のアトリエは

- ・外国語学習：だれが何をどのように評価するか
- ・フランス語でフランス語を教える

の二つのテーマが設定された。

発表への反応：

発表の中盤で、フランス語研究室が現在抱えている悩みをお話しし、参加者に意見をもらうコーナーを設けた。

「Q1. フランス語研究室来室者を増やすための工夫」については、他大学で勤務している先生方から「初期の来室きっかけを強制的に設けることで、その中で通う人が生まれるのではないか」という意見をいただいた。その先生はフランス語ネイティブの方がいる研究室へ履修者を向かわせるため、毎授業で強制的に2人を指名して「授業に関連する話題をネイティブの方にインタビューして次の授業で結果を発表する」という課題を出すそうだ。

このお話を聞いて、初めての来室きっかけを作るために先生と協働し、授業の一環で来室するという流れを作れるよう検討したいと感じた。

加えて、発表の最後には「フランス語ネイティブの留学生との交流はどの程度行なっているのか」という質問を受けた。フランス語研究室は現状、留学生やフランス語ネイティブの学生との活発な交流は行われていない。フランス語学習中級者がさらにレベルアップしたいと考えたとき、サポートできない状態にあるという重大な気づきを得た。今後、方策を検討していきたい。

終わりに：

この度は、学会参加のために貴重な補助をいただきましたSFC学会に心より感謝申し上げます。この発表が、フランス語研究室が2024年度に積み上げた活動を棚卸しして振り返る機会になり、これからの運営方針を考える上でもとても良い機会になりました。

これからもフランス語研究室という立場からできることを模索し続けたいと思います。